## そ の 119

中に、標題二人の短 から父君木下右治先 い師弟交流がよくわ す)の日記等が南信 かる日記(自大正十 州地域資料センター 丘在住の木下和彦氏 全大正十五年十二月 に寄贈された。その 三年十一月三十日~ 昨年、飯田市竜 敬称を略 である。 集』『歌道小見』『万 った。写生主義に立 ラギ』の編集にあた 評』等がある。 田俊彦。雑誌『比牟 葉集の鑑賞及び其批 凸 を創刊。 伊藤左 した。著書に『太虚 十夫に師事し、『アラ 木下右治(一八九 鍛錬道を実践 本名、久保

た。 域歌会の育成に努め るとともに、藪蘭会 彦没後は、アララギ 保義等の指導を受け ・かざこし会等の地 ・ヒムロ会員とし その木下が、後年、 森山汀川・五味 · 森山汀川 · 土田耕 百穂・中村憲吉・土 あった。その時の写 歌会が開かれた時で た時と、続く九月三 彦・斎藤茂吉・平福 真を見ると、島木赤 屋文明·胡桃澤勘内 日に上諏訪温泉寺で

## 師島木赤彦と弟木下右治 ~若き日の木下の日記から①~

倉 貞 男

二十三付)に発表し た回想文「島木赤彦」 年長けてから本紙 は、大正十年八月二 て赤彦を知ったの によれば、彼が初め 十二日に、上諏訪地 (昭和四十三年一月 ている。 たのは、同年十月に 錚々たる面々が写っ 平等、アララギの するので、その送別 茂吉がドイツへ留学 会でもあったからの これほど大勢揃っ

その部分を採りだし

飯田市龍江出身の教

八~一九七六)は、

育者であり、歌人で

八日)があるので、

て紹介したい。

歌人であり、教育者

館長を歴任した。赤

蔵寺で歌会が開かれ

ようだ。しかし、後

○は、諏訪出身の

(一八七六~一九] 著名な島木赤彦

の校長を務めた後、 ある。上郷小学校他

竜丘村教育長兼公民



は、前後四回の訪問 した。標題の日記に 一首ずつ丁寧に添削

れば、この時はあま り大勢の大家が揃っ ていたので、特に赤 なかったという。 彦の印象は残ってい 年の木下の述懐によ 不下がアララギの 作歌に親しむように とであろう。以後、 と右の歌会前後のこ 正十年である。きっ 会員になったのは大 間や個人で短歌を詠 なり、折に触れて仲 を述べてみたい。 が記されているの たのは、大正十四年 初に直接指導を受け で、以下にその概要 一月二十三日であ 木下が赤彦から最

書き記している。 み、その歌を日記に **房)を訪問し、直接** く、木下は同じ下伊 **小の赤彦宅(柿陰山** 那出身の先輩丸山東 に従って下諏訪高 それから間もな 記である。(仮名遣い の高島小学校に勤務 等は、原文のまま) 以下は、その日の日 才、木下二十八歳。 していた。時に、赤彦 草刈りを日毎の業と 無訪山浦 一佳作と言はる― く生ひ立つらしも 言ひこせり心やすけ しもの左記。 教へ子

ふ。よき歌と言はれ 高木に久保田先生を 訪ひ歌評してもら 丸山東一氏と共に 年暮れんとす 冬早く雪降りければ はる 人は落葉掻き得ず この歌甚だよしと

した)

ここでは赤鉛筆で○ 記載されているが、

印のある二首のみ記

べし。勉強すべし。

(日記には他に四首

いと言はる。勉強す 毎日作って持って来 り。甚だ良き事なり

らひし事はじめてな

先生に歌評しても

彦は彼らを快く迎え

望できる部屋で、 八れ、西に諏訪湖を になった。晩年の赤

歌をみてもらうよう

DOUSEDOUS

思うべきであろう。

木下右治の日記 の書きぶりの中に、 の中でも大きな意味 彼の高揚した気分を を持つ。喜びを抑え であり、自身の人生 たことは、木下にと を受けるようになっ って実に幸せなこと た、淡々とした日記 赤彦から直接指道